小学生の部

としのはなれたおともだち

邑久小学校　一年　千田　芽依

わたしには、としのはなれたおともだちがいます。ほんとはおともだちじゃなくて、ひいおばあちゃんです。そうおもうのは、にているところがふたつあるからです。ひとつめは、えとがおなじいのししどしなところです。ひいおばあちゃんは七十九さい、わたしは六さいです。ふたつめは、おにいちゃんがふたりいるところです。わたしもひいおばあちゃんもおにいちゃんがふたりいて、やさしくしてもらえるところ、かぞくのなかでいちばんちいさいところもにています。

わたしはおともだちのいえにおとまりにいくことがだいすきです。いっしょにごはんをたべたり、おふろにはいったり、ねるまえにはおともだちのこどものころのおはなしきくのがたのしいです。

おともだちはいつも、

「めいちゃん、いつもありがとう。」

「あそびにきてくれてうれしい。」

「めいちゃんだいすきだよ。」

といってくれます。でも、わたしのほうがもっとだいすきです。

おともだちがあしがいたくて、げんきがないときはすこしさみしいです。しっぷをはってあげたり、くすりをとってあげたりするとすごくよろこんでくれます。ひいおばあちゃんはたいせつなおともだちだから、これからもずっとずっとげんきでいてほしいです。そのためにたくさんおてつだいをしてあげたいです。

これからもずっとずっとなかよくしたいです。ひいおばあちゃんだいすきだよ。これからもとしのはなれたおともだちでいてね。

おじいちゃんにとどくといいな

邑久小学校　二年　畑　雪乃

小学校が夏休みに入る少し前に、びょう気でにゅういんしていたおじいちゃんがなくなりました。おそうしきをしてみんなでおじいちゃんのほねやしゃしんやお花を家へかざりました。

つぎの日、学校でそだてているきゅうりがなったので、家にもって帰るとおかあさんが、

「このきゅうりをつかって、おじいちゃんのさいだんにそなえるものを、ゆきちゃんが作ってみない？」

と言いました。なくなったおじいちゃんがどうやってごはんを食べるのかふしぎに思ったので、おかあさんにわけをきいてみました。わたしたちがごはんをおいしく食べられるのは、おじいちゃんのおかげだから、かんしゃをつたえるためだとわかりました。

まず、きゅうりをほうちょうで切りました。それから、しおもみをして、わかめやミニトマトも入れました。おじいちゃんの口に入るサイズを考えながら切りました。あじをつけてごまをふってかんせいです。

おじいちゃんがお空で私の作ったごはんを食べてくれたらいいな。と思いながら一生けんめい作りました。

かんせいしたすのものをおばあちゃんにとどけました。

「学校でそだてたきゅうりで、わたしが作ったよ。」

とおしえてあげると、

「すごいね。おじいちゃんもきっとよろこぶよ。ゆきちゃんありがとう。」

とおばあちゃんはよろこんでくれました。

おじいちゃんがなくなって、おばあちゃんもわたしもとてもさみしいけど、おじいちゃんのことを思い出しながら、これからもごはんを作ってとどけたいです。そして、おじいちゃんに、わたしが元気にがんばっていることを、空から見まもっていてもらいたいです。

「ここちゃんタイム」

邑久小学校　三年　城戸　心希

「ここちゃんターイム！」「イェーイ！」

夜ごはんのとき家ぞくみんながせきにすわると始まるお話タイム。わたしは、この時間が楽しみだ。この時間が始まると早くしゃべりたい気持ちでいっぱいになる。

四月からお母さんが仕事にふっきした。二年生までとくらべて、家に帰ってもお母さんは家のことでいそがしいし、家ぞくがそろって話をする時間が少なくなった。今までは帰ったらすぐにお母さんに学校や友だちのことをたくさん聞いてもらっていたのに、なかなかゆっくり聞いてもらえなくてわたしはちょっと悲しかった。話をしたいけど話せなくてなんかモヤモヤした。

ある日お母さんが「今日から夜ごはんの時には、家ぞくのお話タイムをしよう。」と言った。わたしは、何を話したらいいんだろう。みんなに聞いてもらえるのはうれしいようなはずかしいようなかんじがするなと思った。名前は「ここちゃんタイム！」その日にあったことやうれしかったこと、悲しかったことなど聞いてほしいことを何でも話す時間だ。ルールはテレビをけして、話している人の話をしっかり聞くことだ。わたしが話している時、家族は「そうなんだね。それは楽しかったね。」とみんなわたしの方を向いてニコニコしながらたくさん聞いてくれる。「体いくで後ろ回りができるようになりたい。」と話すとお父さんが「よっしゃ、とっくんするぞ。」とごはんのあとに毎日いっしょに練習してくれた。家ぞくに話を聞いてもらう時は、今日あったことをみんなが分かるようにくわしく話した。毎日つづけているとき

もっと話したいなという気持ちがあふれてきた。三さいの妹も話をする。妹はまだ小さくて一人で話をするのはむずかしいから、わたしが「何して遊んだの。」「だれと遊んだの。」「楽しかった。」としつ問する。妹は「アンパンマン。」「ばあば。」「楽しかった。」と一生けんめいに答える。毎日話すからさい近では「今日は公園行ってー、じいじ、ばあばと滑り台とー、おにごっこして、家でねたよ。楽しかったです。おしまい。」と言って上手に話すようになった。どんどん話が上手になる妹を見て、せい長しているな、とうれしくなる。そして前よりもお話の時間がもり上がった。

　ここちゃんタイムの後は心がすっきりして温かい気持ちになる。わたしはこの時間が始まって「おしゃべりは家ぞくをつなぐにじのはし」だと思う。家ぞくがおたがいの出来事や気持ちを話したり、聞いたりすることでいっしょにいない時間の様子や気持ちが知れてみんなともっと心がつながっていく気がするからだ。わたしは家ぞくのえがおがあふれたこの温かい時間が大好きだ。

家族でめざすぞ、あこがれの黒帯

国府小学校　四年　野村　都羽

「押忍」

道場に大きな声がひびきます。私は二人の兄と母の四人で空手を習っています。母は、

「日本の武道を子どもに学んでほしい」そして、「空手を学ぶ大変さがわからないと、子どもの気持ちもわからないだろう」と言って、母も兄たちといっしょに空手を習い始めました。私は最初、ついて行って練習を見ているだけでしたが、小学生になってから、私も強くなりたいと思い、空手家の仲間入りをしました。

練習の中でも、とくに「型」の順番や体の使い方を覚えるのは、とても大変です。

しょう級しんさが近づくと、兄たちが家でいっしょに練習をしてくれます。私が上手に技を出せない時は、兄が相手になってくれて、

「対戦相手をよく見て、足をここまであげるんだよ。」

と、コツやポイントをわかりやすく教えてくれます。はじめはバラバラだった型が、練習を続けるうちに一つにぴたっと決まるようになります。兄がいてくれて、とても心強いです。母もとなりで私たちを見ながら、

「みんなに負けないぞ。」

と言って、いっしょに練習しています。

私が今までで一番心に残っていることは、初めて試合に出た時のことです。会場に行ってみると対戦相手がみんな男の子でした。

「私よりみんな強そう。負けちゃうかも。」と一気に不安になって、む

ねがドキドキ鳴り始めました。でも、心の中で「お兄ちゃんに教えてもらったことを思い出そう」と何度も自分に言い聞かせました。ぜったい勝ってやると夢中で技を出しました。遠くから、

「とわちゃん、がんばれ。」

母の声が聞こえました。ねらっていたハイキックが相手の顔に決まって、一本を取って勝つことができました。兄と練習した成果が本番で思い切り出せて、飛び上がりたいぐらいうれしかったです。お兄ちゃんが「きれいに決まったね。すごいじゃん。」

と、たくさんほめてくれました。試合に出るのを少しまよっていましたが、出てみて本当によかったと思いました。

今、私たちの目標は、家族四人みんなで黒帯になることです。空手には難しいことがたくさんあります。でも、一番難しいのは「ずっと続けること」です。練習がめんどうくさくて、ときどきやめたいなと思ったこともあります。でも、にげずに、少しずつでも努力を続けるからこそ、自分に負けない強い心をもった人になれると思います。

もうすぐ兄と母は茶帯から黒帯になるしんさを受けます。私もいつか必ずあこがれの黒帯になって、体も心も強く、兄や母のようにやさしくてかっこいい人になりたいと思います。

「ダメ」を「いいよ」に変えた私の挑戦

邑久小学校　五年　大河原　らん

「最初はお世話すると言っても、何年かたったら絶対に、お父さんに散歩の役が回ってくるに決まっている。だからダメ！」

お父さんの返事はいつも決まっていました。

私は、低学年のころから動物に興味をもっていました。最近、仲の良い友達二人が次々に犬を飼い始め、犬と一緒に散歩したりいろんな所に行ったりしている話を聞くようになり、「いいなぁ」とあこがれるようになりました。そして、犬を家族のように大切にしている友達を見て、私の「犬を飼いたい」思いがどんどん強くなっていったのです。

そんな私の願いをかなえるためには、ダメと言い続けるお父さんを説得しなければいけません。大変です。そこで、犬を飼うことに賛成していたお母さんに相談すると、

「せっかく飼うのなら、家族みんなが納得することが大事だよ。お父さんが納得するように、らんの、犬への思いがどれだけ強いかや犬を飼うことで家族にどんなメリットがあるかなど数字を使ってプレゼンしてみたら。」と、アドバイスをもらいました。

そこで私は、三つの説得作戦を実行することにしました。一つ目は調査作戦。私がこれまで読んできた犬に関する多くの本をまとめ、犬を飼うことで起こる様々な出来事に対応できる知識をもっていることをアピールすることにしました。二つ目はインタビュー作戦。実際に犬を散歩させている人が多く集まる公園を訪れ、犬を飼ってよかったことや、犬を飼うことでどんな変化があったかなどを聞き取ることにしました。三つめは提案作戦。お父さんが最も気にしていた「犬の世

話の負担が自分に回ってくること」を乗りこえるために、家族の役割分担を決めました。

そして、これらをまとめたものを使ってお父さんにプレゼンをしました。お父さんは、

「インタビューした人みんな楽しみが増える、いやされると言っていたんだね。うちもそうなるとうれしいね。」

と言いました。最後に、

「今より早起きになるけど頑張って。散歩や掃除など手伝えることはお父さんもするよ。」

と言ってくれました。そして、何と、その場で、犬を飼えるようになったのです。私の言葉がお父さんの心に届いた瞬間は、とてもうれしかったです。私の説得作戦大成功です。

今、犬を飼い始めて四か月たちました。犬を飼うことにずっと反対していたお父さんは見ていておかしいくらい、一番、犬を甘やかしています。私の家の中心には犬がいて、

「今日、トレーの上でおしっこできたよ。」など、毎日の家族の会話に犬が登場します。

家族の間でも意見が合わないことはよくあります。その時に感情的に言うのではなく、自分の考えを整理して、冷静に伝えることが大切です。言葉でお互いの心をつなぎ、みんなが温かい気持ちになれる家族でいたいです。

笑顔あふれるたまご焼き

行幸小学校　六年　竹原　悠真

ぼくの得意料理はたまご焼きだ。

ある日、お母さんが、

「晩ごはんに、もう一品何を作ろうかな。」

と言った。ぼくはその言葉を聞いて、

「じゃあ、ぼくがたまご焼きを作ってあげるよ。」

と答えた。上手に作れる自身はなかったけれど、これまでに何回かは作ったことがあるから家族のためにおいしいたまご焼きをつくってあげたいと思った。そして、たまご、砂糖、塩、油、フライパン、ボウル、さいばしを用意して、ぼくは、たまご焼きを作り始めた。その様子を見ていたお母さんが、

「すごく手際がよくて、びっくり。」

と言った。ぼくは、得意気な気持ちになった。

「たまご焼き出来たよ。」

とぼくは言って、食卓に出した。

お姉ちゃんが高校から帰り、お父さんが仕事から帰り、家族全員がそろったところで、晩ごはんを食べ始めた。お姉ちゃんがたまご焼きを食べて、

「んっ、今日のたまご焼きはいつもと違う。いつものたまご焼きもおいしいけど今日のたまご焼きはめちゃくちゃおいしい。」

と言った。ぼくはうれしい気持ちとはずかしい気持ちを表情にださないように

「ぼくが作ったけど。」

と言った。お父さんも、

「めちゃくちゃおいしいし、上手に作れとる。」

と言って、ほめてくれた。お母さんが、

「今日は、悠真がたまご焼きを作ってくれてすごい助かったんよ。しかも、上手においしく作れてる。」

と言った。ぼくは、みんなの言葉を聞いて、すごくうれしくなった。たまご焼きを家族のために作ってよかったと思った。

ある日、お姉ちゃんが高校にもっていくお弁当に、ぼくの作ったたまご焼きを入れた。高校から帰って来てすぐに、お姉ちゃんが、

「今日、悠真の作ったたまご焼きを見た友達が、『すごくきれいでおいしいそうなたまご焼きだね。』って言ったんよ。」

と、にこにこしながら言った。それを聞いたぼくもうれしくなってにこにこした。

お母さんとお父さんが、

「悠真の作ったたまご焼きは、みんなをにこにこさせるたまご焼きじゃな。」

と笑顔で言った。

ぼくのたまご焼き作りは、何気ない一言から始まったけど、家族みんなが笑顔になり、食卓での会話がはずみ、何だか心が温かい気持ちになった。

これからも、もっともっとおいしいたまご焼きを作りたいです。

中学生の部

私の弟について

邑久中学校　一年　岡本　結菜

私の弟は、室内では、プラモデルやレゴブロックなどのパーツを組み合わせて、乗り物やロボットを作っています。室外では、虫取りや運動が好きで、たくさん庭で走っています。

学校では、二年生の二学期までは、元気に楽しく通っていました。でも、三学期からは変わりました。いじめられたことが原因で、学校にいけなくなってしまいました。学校に行く日がだんだん減っていき、行けた日も、授業の内容に追いつけず、いやになって帰ってしまうこともありました。でも、たくさんの先生達や家族のみんなが、いろんな声かけをしてくれたおかげで、少し学校に行く日が増えていき、三年生ではほとんど毎日学校へ行きました。四年生では、一学期の宿泊研修に「友達の輪に入れるのかな」「初めての宿泊研修で緊張して、夜に寝れないんじゃないのかな」と不安でした。そして、当日、朝は不安な顔で家を出発しました。研修中の活動内容はくわしくは分かりませんが、帰ってきたときには「疲れた」その一言でした。でも、何日か後には「楽しかった」と言っていて安心しました。二学期からは担任の先生が変わり、クラスの環境が変わってしまいました。それで少しずつ行けなくなって勉強が追いつけなくなり始めました。そこで、先生が放課後に学習内容を教えてくれることになりました。初めはうれしそうでしたが、何回か行くと、めんどくさくなって行かなくなってしまいました。ずっと行かなかったら宿題が分からなくなるから、

私が弟の連らく帳を毎日持っていくことにしました。毎日持っていくのは、正直めんどくさかったけど弟が学校に行くようになればいいなと思いました。

私の弟が学校に行かなくなったとき、初めは、「学校に行かなくていいなんてズルイな」「なんで学校に行かなくても、宿題をできていなくても、お母さんや先生達におこられないんだろう」など、いろいろな疑問が出てきました。でも、今思えば、お母さん達が本当に甘やかしていたのではなくて、「少しでも多くの日数、学校に行ってほしい」という気持ちだったんだろうなということが分かります。そして、そんな弟をずっと見守り続けることができる家族や先生達がすごいと思います。

私の弟は、ずっと家にいるので、暗いイメージや悪いイメージを持っている人は少なくないと思います。でも、家では暗いときもありますが、明るくて面白い弟です。

「不登校」という一言で暗いイメージを持っている人も多いと思います。でも、実際は全然ちがいます。学校に行けなくても、できることはたくさんあります。そして、「なにもできない人」と考えるのではなくいろんなことに挑戦してみることがとても大切です。

「不登校の人」という分類で分けると、差別されがちです。でも、みんな同じ人間です。だれにでも「できること」や「できないこと」があると思います。私は差別をせずに、みんなと平等に接することができる人になりたいと思います。

お父さん、ありがとう。お父さん、がんばれ。

長船中学校　二年　赤木　梨沙

「ごめん、お父さん、行けなくなりそう。」

七月二十八日、旅行間近の夜。仕事に行っている父から母へ、一本の電話があった。

「わかった。」

とだけ言って電話を切った。電話の内容を聞いていた私は、母と

「お父さんたちも行くのかな。」

と話した。

私の父は消防士。職場である消防署では、救急救命士として救急車に乗っており、火事が発生したならば、消防車にも乗って、空いた時間では訓練や事務作業を行っていると父から聞いている。休みの日でも朝早くからランニングをしており、体を動かしている姿をよく見ている。そんな父は普段とてもおしゃべりで、明るい性格だ。休日は私たち家族に出来たてのおいしいごはんを作ってくれる。夜になるとよくビールを片手にお笑いのテレビ番組を見ながらゲラゲラと笑っている。仕事の日は朝、母や私たち兄弟を見送ってからすぐ職場へ向けて出発する。二十四時間勤務である父はよく、朝、仕事から帰ってきて倒れるように寝ることが多い。それでも、私の両親は共働きで、平日は母の仕事の帰りが遅いため、家事や習い事の送迎など、家族のためにたくさんのことをしてくれている。しかしながら実のところ、最近の私は理由もなく父に腹を立てていることが度々あり、もやもやしていた。それは、昼寝をしている父に、

「昼間から寝るなんて。」

と内心思うことがあったからだ。しかし、今回の出来事であることに私は気がついた。

今年の夏、毎年恒例の家族旅行を予定していた。家族みんな海が好きで、毎年決まった海へ行く私たち家族。もちろん今年も楽しみにしていた。ところが、令和八年七月二十八日、熊本が震源地の大きな地震が起きた。岡山県からもたくさんの消防士が現地へ向かった。父の職場からも、それは同様である。そのため、休暇を予定している父も急遽出勤となった。この熊本地震では、県内外の各地から、地震当日の夜中に出発して現地へ救助に向かう。消防士、警察官、自衛隊ら多くの人の姿を、テレビやＳＮＳで目にした。それを見て私は、離れた場所からでも、被災者の救助を最優先し、誰かのために動く人がたくさんいることに気がついた。自分の父もそのうちの一人であることをとても誇りに思った。私は、自分の父のことを考えた。仕事が休みの日でも火事のサイレンが聞こえると自ら仕事へ向かう準備をする父。台風の日にも急遽仕事へ向かう父。私が小学二年生のとき、半年間も家族と離れて九州で救急救命士の資格を取るために学校へ行っていた父。私たち兄弟は、毎日おいしいものを食べて、行きたいところへ遊びに行けて、自分がしたいと思う習い事も色々させてもらえている。それは、私がぐっすり寝ている夜も指令があれば眠気眼で助けに向かう父がいるからだとハッと気付かされた、と同時に今まで昼寝をしている父に腹を立ててしまっていた自分がなさけなくなった。

家に帰れば、冗談を言って私たち兄弟を笑わせてくれたり、怒っている母の機嫌をとったりして、休みの日は家族サービスをしてくれる私の父。また、父からの電話にただ一言

「わかった。」

と答えた母にも

「さすがだな。」

と思った。楽しみにしていた家族旅行が直前でなくなるその気持ちよりも、父の仕事を理解している母だからこそ言えた、深い一言だったと悟った。

今までの私は、父が家族にしていてくれたことや私たちが今楽しく生活していることを当たり前だと思っていた。しかし、それは違った。父がどんなときでも仕事と向き合い、訓練をしたり、助けを求める人のために頑張ってくれたりしているからこそ今の私たちの家族があるのだと改めて実感し、とても誇らしく思った。

そして私は今、父に伝えたい。

「とと、いつもありがとう。」

「よりよい家庭づくり」

長船中学校　三年　米﨑　潤葉

私はよりよい家庭をつくるために自分の中で心がけていることが四つあります。

一つ目は家族の誕生日を大切にすることです。私は小学校の高学年ぐらいから家族よりも友達や外での人間関係を優先するようになりました。それからなんとなく家族のあいだに少し距離ができたように感じました。私は気まずくてどうしていいのかなやんでいました。でも周りの家族でとても仲の良い友達を見てみると、家族を優先して誕生日を祝っていました。そこから私は友達ばかりではなく家族の誕生日をしっかり祝うようになりました。

二つ目は、母の日や父の日など子どもから感謝をおくる日に少しでもいいから感謝の言葉やプレゼントを渡すことです。真正面から両親にしっかり感謝を伝えるのは少し恥ずかしいときもあります。だからこそ、お手紙にして普段言えないようなことを文字に気持ちを込めて書いてみたり、自分が得意なイラストで両親の似顔絵を描いてみたりといろいろな工夫をして少しでも必ず感謝が伝わるようにしています。

三つ目は、楽しかった出来事、悲しかったことを家族に共有・相談することです。これも自分のことを家族に話すのは恥ずかしいと思いました。また今までは私があまり自分の出来事を話していなかったというのもあって真面目に話を聞いてくれないときもありました。でも、毎日、毎日根気強く話していたら家族も私が自分の話をしてくれるようになったと理解してくれて話を聞いてくれるようになりました。このおかげで毎晩ご飯を食べる時間が前よりも楽しい時間になりました。

四つ目は、休日に家族でドライブに行ったり出かけたりすることです。今まではどうしてもめんどくさい気持ちが勝ってしまったり友達との約束を入れておいて家族と出かけることを避けていました。ですが、休日に家族の一人が用事があればみんなで車で行ったり料理で買い物をしないといけないときもみんなで車で行くようになりました。そのおかげで家族との交流が増えたり、私の小さな用事でも車を出してくれるようになりました。

これらのことを中学生になって後半ぐらいから心がけ始めました。まだ始めて少ししか続けていないのにも関わらず、家族が家に集まってから笑顔が増え、会話も増え、家の中の雰囲気が明るくなったような気がします。これからも仲良し家族でいれるようにこの四つのことを継続できるよう頑張ろうと思います。また、この四つ以外でも新しいものを見つけたらどんどんやってみようと思います。

あなたがいるだけで

行幸小学校　保護者　清水　亮太郎

「パパがいないって泣いてるよ。」仕事に向かっている私に、妻から電話がかかってきた。その朝、私は子供たちが眠っている間に、そっと家を出た。せっかく気持ちよさそうに眠っているのだから、朝は少しでもゆっくり寝かせてあげたい。子どもたちのために、そうしたつもりだった。

ところが、電話の向こうから聞こえてきたのは、「起こしてくれなかった。」「パパのうそつき。」「ぎゅってしてほしかった。」という子どもたちの声だった。「ごめんね。まだ寝たいと思って……。」そう謝る私に、妻が言った。「子どもたちは、パパが大好きなんだよ。」私は子どものためと思いながら、子どもの気持ちを自分で決めてしまっていたことに気づいた。

わが家には三人の子どもがいる。私は子どもたちの話を聴くのが大好きだ。学校であったこと、友達のこと、夢中になっていること。時には、よく分からない話が延々と続くこともある。それでも、楽しそうに話す顔を見ていると、それだけで幸せな気持ちになる。だから、子どもたちが何かをしたいと言ったとき、できるだけ「どうしたいの？」「どうなりたいの？」と聴くようにしている。

習い事で疲れたり、思うようにいかなかったりすることもある。そんなときも、続けることを押しつけるのではなく、「どうしたい？それでもしたい？」と聴く。そして「したい」と言うのなら「分かった。パパは全力で応援するよ」と伝える。夢も三人三様だ。大きな夢でも、小さな「してみたい」でもいい。親が子どもの進む道を決めるのでは

なく、自分で選んだ道を歩けるよう、できる範囲で環境をつくる。それが親として私にできることだと思っている。

もちろん、わが家はいつも笑っているわけではない。兄弟げんかもする。そんなときは「自分たちでしっかり話し合ってね。相手の話を聴いてね」と伝える。私が本気で叱ることもある。人を深く傷つける言葉を使ったときだ。大切なことだからこそ、強く伝える。私自身がきつく言いすぎたと思えば、「きつく言ってごめんね。でも、とても大切なことだから」と私も謝る。そして最後は抱きしめる。

親だからいつも正しいわけでない。間違えたら「ごめんね」と言う。うれしかったら「ありがとう」と言う。大切なら「大好き」と言う。思っているだけではなく、できるだけ言葉にして伝えたい。私は普段から子どもたちに「大好きだよ。」「生まれてきてくれてありがとう。」「あなたがいるだけで、パパは幸せだよ」と伝えている。何かができるから大切なのではない。勉強ができるからでも、夢をかなえてくれるからでもない。ただ、この世に生まれ、今ここにいてくれる。そのこと自体が、私にとってかけがえのない幸せなのだ。

子どもたちの前でも、妻に「大好き」と伝える。家族みんなで抱きしめ合うこともある少し照れくさいかもしれない。でも、大切な人に大切だと思っていることを、私は言葉や行動で伝え続けたい。そんな私に、子どもたちはよく言う。「パパ、ずっとずっと長生きしてね。１２０歳まで！」思わず笑ってしまう。でも、その言葉を聞くたび、胸の奥が温かくなる。

そして、忘れてはいけない人がいる。妻だ。私が仕事をしている間も、三人の子どもたちに寄り添い、たくさんの愛情を注いでくれている。楽しいことばかりではない。大変なこともたくさんあると思う。それでも子どもたちの気持ちを受け止め、ときには私にその気持ちを

教えてくれる。感謝してもしきれない。私は妻を幸せにしたい。そしてそれ以上に、これからも妻と一緒に幸せであり続けたい。

明るい家庭とは、けんかをしない家庭でも、いつも笑っている家庭でもないのかもしれない。泣いたり、怒ったり、意見がぶつかったりしても、自分の気持ちを安心して話せる。そして、誰かがその声を聴いてくれる。「ありがとう」「ごめんね」「大好き」が素直に言える。私はそんな家庭でありたい。

仕事から帰って玄関の扉を開ける。「パパ！」今日も子供たちの声が聞こえる。私は子どもたちを幸せにしたいと思っていた。でも、毎日たくさんの幸せをもらっているのは、きっと私の方だ。

妻へ。子どもたちへ。

私の家族でいてくれて、ありがとう。

あなたたちがいるだけで、私は幸せです。